



大学での学習

～私の体験～

上岡 国夫

社会に出てから

近頃、もう四十五年も前になる学生時代を思い出すことが多い。今の学生をそのころと比べてどうのこうのと言うつもりは全くない。私の学生時代は、「胸に棘さすこと」ばかりであった。何を勉強していたのであろうか。何も思い出せない。ドイツ語の時間になると先生にいやみを言われるのがいやで一所懸命辞書をめくってどうやらすり抜ける、こんなことがいやに鮮明に浮かんでくる。生活のためのアルバイトとドイツ語しか思い出せない私の大学生活は途中の頓挫もあって、八年間続いた。どうやら最低限の単位で卒業と教員免許状を手にして教職に就くことになった。本当に勉強しなかったのは就職してからだったようである。心理学も教育学もロシア語もなんだか無性に勉強しなくなった。勉強したいという気持ちは学生時代にはそれほど強くなく、社会でさまざまな経験を積む過程で発生するものなのかも知れない。そこで、三十五歳で大学院に入学することにした。これは今思い起こしてみても充実した五年間であったように思える。でも大学は私にとって何だったのだろうか。ただ一つ、がむしゃらに何かに没頭

する中に漠然としたものではあったが、何か形成されていったのかもしれない。

大学で学ぶもの

だから私は大学で学ぶべきものは、その形のはっきりしたものでなくともよく、これからの精神形成の土台となるものであればいいと思う。幸い、経済学部は医学部や教育学部などと異なって、いわゆる「目的機関」ではない。私の学生時代はこれを「つぶしがきく」などというこゝとばで表したものである。教育学で言う形式陶冶であって、直ちに役立つものを教育する実質陶冶ではないが、その後の人生を広く支えてくれるものの見方・考え方を形成する大事な時期と機会を提供してくれるものである。大学で学ぶものはこれだと思はる。このような意味から、私は外国語を思い切り学習することを薦めたい。一つは、言語学習はまさに論理力、推理力、学習力などの形式陶冶的能力を与えてくれるからであり、もう一つは言語は人類のすべての歴史の結晶だからである。心理学者ヴゴツキーはこれを「人類の全達成」と呼んでいるが、この全達成は言語の中に結実しているのである。

ある民族の言語を学習するということは、その民族の全達成を学ぶこと、魂を学ぶことに他ならない。国際感覚に乏し

い日本人には打ってつけの教材を提供してくれる。若いみなさんには、成績のためではなく、単位のためでもなく、それを話している人たちの魂に触れたいという気持ちで勉強してもらいたいと思っている。

レーニンの演説

「学べ、学べ、そして学べ」。少々古い話になるが、この言葉はロシア革命の指導

者レーニンが青年たちに行った演説の中に出てくる。革命を達成するためにはとにかく学習せよということである。私たちは勉強とか学習は人生の準備段階で行うのであって、成人に達し、社会に出ればもう必要がないと思いがちである。ところがそうではないのである。

革命とまでは言わないまでも、自己を変革し、社会を変革するには学習が必要である。生涯学習の基本はここにある。人生が終わりになるまで学習は続くのである。



上岡 国夫 (かみおか くにお)

経済学部教授。

1964年京都大学教育学部卒業。73年東京大学教育学研究科博士課程単位取得。教育心理学専攻、言語学習論を中心に研究した。茨川高等学校教諭、足利工業大学講師を経て、77年高崎経済大学経済学部講師、84年同教授、03年退職、現在特任教授。この間、1993年～2002年高崎経済大学付属高等学校校長。趣味はデジカメ撮影と蕎麦打ち。ロシア語の力をもっと伸ばして短期でいいからロシアに留学したい。今年の目標はパステルナークの「ドクトルジバコ」を原語で読むこと。

※上岡教授は平成15年3月をもって退職。